

# 姦通裁判

— 18世紀トランシルヴァニアの村の世界 —

秋山晋吾

## 領主夫人が墮ちた “禁断の愛”——。

だが、果たしてこれは、ただの姦通事件なのか……？

**裁判史料**からリアルに立ち上がる、近世東欧の村の生活。

そして、事件は予測不能の深層に辿り着く！

**東欧史研究の旗手、待望の一般書デビュー！**



姦通裁判

— 18世紀トランスシルヴァニアの村の世界 —

秋山晋吾

星海社

129



SEIKAISHA  
SHINSHO



一七六五年の夏、ヨーロッパの東のはずれ、トランシルヴァニア侯国のコザールヴァールという村では、ある事件の裁判の証人尋問が行われていた。尋問の場となった農民の家には一日に数人の村人が呼び出され、村に住む貴族たちの屋敷には二人の裁判官が出向いていった。裁判官の前に立った証人たちは、一人ずつ、読み上げられた二三項目からなる質問に答えた。

証人の一人、農民トマ・ミハーイの二〇歳になる妻オナは、質問の一つに答えて次のように語った。

二年ほど前から、私は下女としてラーツ・イシュトヴァーン様に仕えていました。そのため、ラーツ・イシュトヴァーン様の奥方とラーツ・アーダム様が互いを憎からず思っていることを知っています。イシュトヴァーン様をご不在の際などには、夜な

夜な、人々が寝静まった頃にアーダム様がイシュトヴァーン様のお屋敷にやってきました。そして、そつと敷地に入ってくると、イシュトヴァーン様の奥方がベッドでお休みになっている家から私たち使用人を外に出し、別の小さな家に移動させるのです。私たちが言われるままにすぐに外に出ると、ご両人は家のなかで二人だけになるのです。アーダム様はそんな時いつも未明のうちに立ち去りましたので、朝になって私たちが目を覚ます頃には、その姿を見ることはありませんでした。

オナが何について語っているのか、詳しく説明する必要はあるまい。領主の妻とそこに通ってくる間男の間で繰り広げられる情事を目の当たりにしていた証人が、自分が知っていることを裁判官に向かって語っているのである。間男アーダムは、夜だけでなく昼間にもやってきて領主の妻ダーヴィド・ユデイトと二人で家に閉じこもっていたこと、ときにユデイトを外に連れ出し村はずれの墓地や小麦畑で手を取り合って散歩していたこと、ユデイトを抱き寄せて「ユツィよ、僕の心よ、魂よ」などとささやいていたこと、絹のスカートだの、高価な酒だの、果物だの、宝石がついた金の指輪だのを貢いでいたこと。

オナはまた、（アーダムが愛称でユツィと呼ぶ）ユデイトの行動についても話している。アー

ダムにさらに気にいられるよう瓶入りの「魔法の水」を使っていたこと、自分からアーダムのもとに行く際には子どもたちをオナに預けていたこと、最近、夫の家を飛び出したので村中が大騒ぎになって……。

雄弁なオナの証言に登場するのは、情事の主役たちに限られない。彼らの言動に巻き込まれる村の農民たち、たしなめようとする親しい貴族たち、取り入ろうとする「魔女」、これらの人物が動き回るコザールヴァール村の空間、村の生活に織りこまれた季節のリズム、そして、重なり合うようにして作用する人々の間の力関係。それらが、彼女の言葉の端々から浮かび上がってくる。

前年の一七六四年から二度にわたって行われた証人尋問では、オナを含め合計一〇六人が口を開き、うちコザールヴァール村に住む者は九〇人、のこりの一六人は村と関わりを持つ近隣の町や村の住民たちだった。一三〇軒あまりの家からなるさほど大きくもないこの村では、これほどの数の人たちが証言させられるということ自体、ユディトたちの道ならぬ行いなどとは比べ物にならないほどの波風を立てただろう。それらの証言は、ハンガリー語で記録され、ラテン語の巻頭辞を付せられた、約二〇〇頁の手書きの文書として残された。

本書では、今から二五〇年ほど前に、ヨーロッパの片隅の村を騒がせたこの事件とその証人尋問を読み解いていく。それを通じて、事件そのものというよりも（これ自体はいたってありきたりな痴話喧嘩のように見える）、一八世紀ヨーロッパの村の生活と人々の価値観の隅々を復元してみようと思う。

狙いは大きく二つある。歴史を書くということが史料を読みこむことを土台にして成り立っていること、そしてそれとは逆に、史料がすべてを語ってくれるわけではないということを知ることである。

ではさっそく、事件の世界に入っていってみよう。



目次

プロローグ 3

第一章 姦通事件 19

第二章 村と住民 37

第三章 閨房のなかで 99

第四章 日常性のリズム 157

第五章 日常の非日常性 231

エピソード 270

あとがき 273

主要史料・参考文献 277

写真等出典一覧 284



ペテルブルグ (サンクトペテルブルグ)

ロシア帝国

モスクワ ●

スウェーデン王国

バルト海

プロイセン王国

ポーランド=リトアニア

ワルシャワ ●

トランシルヴァニア侯国

シレジア  
ボヘミア王国

モルドヴァ侯国

ドナウ川

ウィーン ●  
オーストリア諸邦

ポジョニ (ブラチスラヴァ) ●

コザールヴァール ●

ブダ ● ●  
ベシュト ●

ハンガリー王国

テメシュヴァール ●  
ワラキア侯国

トリエステ ●  
オーストリア諸邦

クロアチア

セルビア ●

ボスニア

黒海

トスカーナ大公国

ブルガリア

教皇領

オスマン帝国

イスタンブル ●

ローマ ●

ナポリ王国



ハプスブルク諸邦



神聖ローマ帝国の境界



事件年表

1730 年頃?		ユディト生まれる
1750 年頃?		ユディトとイシュトヴァーン婚姻
1753 年頃		ユディトと下男ヨージの情事 長男ペーテル生まれる
1756 年頃		ユディトと貴族ブダイの情事 長女テレジア生まれる
1760 年頃		ユディトとアーダームの情事始まる 次女カロリナ生まれる
1763 年頃		アーダーム、イシュトヴァーン邸入手
1764 年	5 月頃	イシュトヴァーン、コスタファルヴァへ
	7 月頃	ユディト、エゲルベジュへ
	9 月	第 1 回証人聴取（前半）
	10 月頃	アーダーム夫人カタ、レムヘーニへ ユディト、コザールヴァールへ
1765 年	1 月	第 1 回証人聴取（後半） ユディトとアーダームの同居禁止命令?
	3 月	ユディト、コスタファルヴァへ
	4 月	イシュトヴァーン帰還、屋敷買戻し ユディト夫妻の和解 ユディトとアーダームの面会禁止命令
	6 月	ユディト逃亡 第 2 回証人聴取（～9 月）
1766 年	2 月	判決

おもな登場人物

● ラーツ家

ユデイト（ダーヴィド・ユデイト）…………… 姦通事件の主人公

イシュトヴァーン（ラーツ・イシュトヴァーン）… ユデイトの夫、村の中規模領主

アーダーム…………… イシュトヴァーンの従兄、ユデイトの情夫

カタ…………… アーダームの妻

ヤーノシユ…………… イシュトヴァーンとアーダームの従兄、老イシュトヴァーンの兄

老イシュトヴァーン…………… イシュトヴァーンとアーダームの従兄、内ソルノク県役人

● 農民たち

トマ・ミハイ（年上の）…………… イシュトヴァーンのヨッバージ、屋敷内に居住

オナ…………… 年上のトマ・ミハイの妻、かつてユデイトの下女

トマ・ミハイ（年下の）…………… イシュトヴァーンのヨッバージ、屋敷内に居住

フローラ……………年下のトマ・ミハーイの妻、パスカル・ウルスの娘、下女ナスタージアの姉  
パスカル・ウルス……………イシュトヴァーンのヨッバージ、事件の最中に逃亡  
フルバーン・ヴァシル……………イシュトヴァーン（のちアーダーム）のジエツレール  
ウルヴァ……………フルバーン・ヴァシルの妻  
モルドヴァーン・トジェル……………イシュトヴァーンのジエツレール、屋敷内に居住  
マロシャーン・ウルス……………イシュトヴァーンのジエツレール  
ダーンチュ・ユオン……………イシュトヴァーン（のちマクライ・エレク）のジエツレール、酒売り  
ユアナ……………ダーンチュ・ユオンの妻  
ツイガーニ・ガーボル……………イシュトヴァーンの「ジプシー農奴」  
マリア……………ツイガーニ・ガーボルの妻

● 下女・下男たち

ナスタージア……………ユデイトの下女、パスカル・ウルスの娘、事件の最中に逃亡  
エルシヨーク……………ユデイトの下女、デーシユの都市民の娘  
ガチナ……………ユデイトの下女、隣村モノシュトルセグの農民の娘

ヨージ（ヨーージェフ）……………イシュトヴァーンの下男、ユデイトの情夫、のち解雇

● 貴族たち

テレキ・カーロイ……………大貴族、内ソルノク県主席県令、普段は村に住まない

マクライ・エレク……………コザールヴァールの中規模貴族、カルヴァン派

コマーロミ・ペーテル……………コザールヴァールの中規模貴族、カルヴァン派

ペトキ・ジエルジュ……………コザールヴァールの貴族、教会堂占拠事件に連座

ブダイ・イシュトヴァーン……………隣村モノシュトルセグの貴族、ユデイトの情夫

● 聖職者など

ポパ・ヤンク……………コザールヴァールのギリシア・カトリック司祭

チチヨーウーイファル村の「魔女」……………ギリシア・カトリック司祭ポパ・ペトレの妻

※人名は史料に従い、ハンガリー式に「姓・名」の順で表記した

トランシルヴァニア地名対照表（ハンガリー語名……ルーマニア語名）

エゲルベジュ	アグルビチウ
コザールヴァール	クズドリオアラ
コスタファルヴァ	コステニ
コロジュヴァール	クルージュ＝ナポカ
コーロードセントマルトン	コロイسنマルティン
サモシュウーイヴァール	ゲルラ
ジュラフエールヴァール	アルバ＝ユリア
セントマルギタ	スンマルギタ
デーシュ	デジュ
チチョーウーイファル	チチエウ＝コラビア
テメシュヴァール	ティミシヨアラ
トルダ	トゥルダ

バラージュファルヴァ	ブラージュ
ペテレート	ペテリテア
ベルナード	ベルナデア
ヘレペ	ヘレペア
ネーマ	ニマ
ネーメティ	ミンティウ＝ゲルリ
マジアルケブレシュ	クブレシュ＝ソメシヤン
マールマロシュ	マラムレシュ
ミケハーザ	ミカ
ミハイファルヴァ	チチエウ＝ミハイエシュティ
メゼーバード	バンド
モノシュトルセグ	マナシュトウレル
レムヘーニ(レメーニ)	レムニウ

※トランシルヴァニアの地名は、史料に従い、ハンガリー語名で表記した



第一章

姦通事件

## ユデイトの放埒はなづら

領主の妻ユデイトの正確な年齢はわからない。村人たちの証言からは、少なくとも裁判の十数年前にはイシュトヴァーンと結婚していたこと、近くの町の寄宿舎で学んでいると思われる一〇歳くらいの息子を筆頭に、七歳前後の娘とその妹の三人の子どもがいたことがわかる。それらから推測すると、裁判が行われた一七六〇年代中頃には、おそらく三代半ばに差し掛かったあたりの年齢だった。

ユデイトの評判はお世辞にも芳かんばしいものではなかった。ある親族の女性は、「二人が一緒になった当初はまづまづの夫婦仲だったのですが、そのうち険悪な関係になって、口喧嘩や取っ組み合いの喧嘩が絶えませんでした。正直に言えば、最初からその原因はユデイトにありました」と冷たく言い放つ。ユデイトたちの屋敷に住みこむ農民マロシャーン・ウルスとその妻アンジラの意見も、多少の気遣いはあるものの同じようなものである。「お二人は結婚して以来、ときに仲良いこともありましたが、概して劣悪な関係でした。イシュトヴァーン様も一時間に二度も三度も食って掛かるような愚かなことをしていましたが、原因の大半は奥様のほうにありました」。

夫イシュトヴァーンが苛立っていたのは、ユデイトの男性関係を疑っていたからだ。農

民マロシャーンの母ネチャによれば、夫婦仲が悪くなったのは、イシュトヴァーンが「あの男とこの男とというように、次々と奥様との関係を勘ぐり始めた一〇年ほど前から」だった。

夫の疑念を裏付けるだけの材料は十分にあった。ユデイトの男性遍歴は、一七六四年九月から翌年一月にかけて行われた一回目の証人尋問のテーマであった。裁判官は証人たちに、ユデイトと三人の男との関係を尋ねている。最初の相手は、一一年ほど前の一七五三年、当時イシュトヴァーン邸に仕えていたヨージという名の下男だった。ユデイトはこの若者をいたく気に入って、手料理を食べさせたり、「きれいな細身のシャツで着飾らせて」連れまわしたりしていた。ほどなくヨージは、二人の仲を訝いぶかったイシュトヴァーンによって家から追い出された。

次の相手は隣村に住むブダイ・イシュトヴァーンという名の貴族で、近くに駐留していた軽騎兵の士官たちを招いた宴会で知りあい、恋仲になったようだ。カールノキ連隊という名称のこの軽騎兵連隊は、一七五六年に七年戦争（一六三三年）が勃発すると、主戦場となったボヘミアやシレジアを転戦したので、ブダイとユデイトの逢瀬はその前ということになる。ブダイは、ときに弟とともにやってきた。そんな時、弟のヤーノシユは村の農民たちと一緒に家の外で暇をつぶして、兄あにが褥しとねから出てくるのを待ったのだった。

ブダイとの関係が終わると、アーダムが現れる。ユデイトとアーダムの関係については本書を通して詳細に触れていくことになるので、ここでは二人の関係が始まったのが（証人によって多少のずれがあるもの）証人聴取の概ね三〜四年前、つまり一七六〇年頃のことだったということだけ確認しておこう。

ユデイトと三人の男たちとの情事には、もれなく結果が伴った。ユデイトの一番上の子であるペーテルという名の男の子は、父親たるべきイシュトヴァーンとは似ても似つかなかったようだ。先述の農婦ネチャは言う。「ペーテルという男の子が誰の子かは知りませんが、背格好や性格、立ち居振る舞いはまさに下男のヨージそっくりでして、一度でもこの若者を見たことがあればすぐにわかるくらいです」。息子夫婦とともにイシュトヴァーンの屋敷内に住んでいたネチャは、その後に生まれたユデイトの二人の娘を産婆として取り上げた。その二人も、生まれて数か月後には、上のテレージャはブダイの子だと、下のカロリナはアーダムの子だとネチャは気づくことになる。三人の子の父親のことは村中ですっかり噂になっており、ユデイトでさえも、ネチャに指摘されると「あっさりそれを認め、イシュトヴァーン様の前でさえも否定しなかった」ほどであった。

子どもたちの本当の父親が誰であるかは、ここではあまり問題ではない。重要なのは、

夫イシュトヴァーンだけでなく、使用人たちも、村人たちも、子どもたちが「不義の子」と確信していたということだ。ユデイト自身が折に触れて自分の貞操さを主張しても、村でそれを信じる者はほとんどいなかった。

### 従兄弟同士の争い

村でのユデイトの評判には、激しやすかったであろうその性格も影響したはずだ。それに対して、証言に登場する夫のイシュトヴァーンは、ときに癩癩かんしゃくを起しては妻のユデイトに石でもって追い回され、間男のアーダムに殴られては泣き言を言う男であった。二人に叩きのめされて自分の屋敷から駆け出してきたイシュトヴァーンは、通りを歩いていた農民に、「妻に殴りかかられてあやうく殺されるところだった」とこぼしてさえる。

イシュトヴァーンの年齢も、アーダムの年齢も不明だが、証言の内容から推測するに、アーダムのほうが年上で、ともに三〇代後半から四〇代半ばといったところのようだ。この二人、父親同士が兄弟で、従兄弟の関係にあった。

アーダムはイシュトヴァーンとは異なり、したたかな男だったようだ。従弟の屋敷に日参してその妻と懇ろになっただけでなく、二人の関係に激高したイシュトヴァーンの手から

ピストルを取り上げると、腹を殴打して、倒れたイシュトヴァーンを足蹴にしてやりこめた。イシュトヴァーンは「盗人め！ 娼婦め！ 間男め！」と叫ぶことしかできなかった。それだけではない、アーダムは、イシュトヴァーンが抱えていた借金を肩代わりすることで彼の屋敷を手に入れ、ユデイトと同じ敷地に住み始めたのだ。しばらくの間、夫婦と間男の奇妙な同居生活が続いた後、イシュトヴァーンは家財道具を持ってコスタファルヴァという自身の別の領地へと去った。アーダムに見捨てられたその妻カタと娘もまた、アーダムの母親が住む遠くの村へと去っていった。イシュトヴァーンが村を出たのが一七六四年の「トウモロコシの最初の草むしりの後」、つまり初夏の五月頃、カタが去ったのが同じ年の「ブドウ収穫の後」、つまり秋の一〇月頃のことだった。

### 一八世紀の聴取記録

イシュトヴァーンの去った屋敷でアーダムが暮らし始め、カタが村を去る準備をしていた頃、つまり一七六四年の九月、村人たちに対する一回目の証人聴取が行われた。この聴取は、九月三日と四日の両日に四四人、四か月ほどの間を空けて翌年一月二二日に六人の農民と貴族を対象に行われた。間隔があいた理由はわからないが、同じ質問項目で行わ

れたこれら五〇人の聴取記録は、三二頁からなる一つの文書にまとめられた。

このような裁判記録は、人々の圧倒的多数が識字能力を持たず、自ら記録を残さなかつた近代以前の民衆の肉声が記された貴重な史料である。そこには、農民の声も、本書の主人公たちのような田舎貴族の日常の姿も、生き生きと書き残されている。

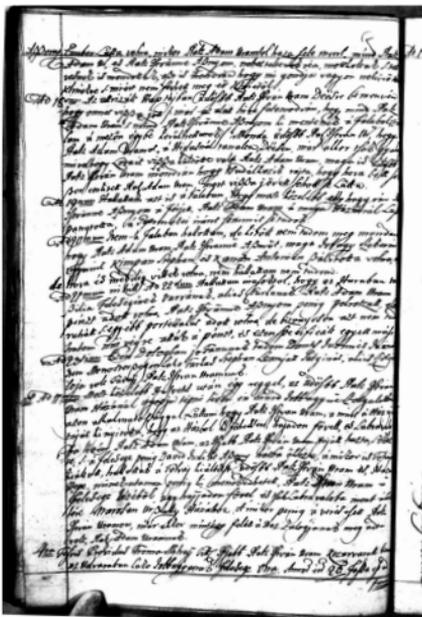
もつとも、ここに記録された「声」は証人たちが話した言葉そのものというわけではない。書記によつて記録される過程で、ある程度の改変や省略が行われたことは確かだし、証人が話した言語と記録の言語が異なる場合、そこには翻訳作業があつた。一八世紀のトランシルヴァニアでは、公文書は公用語のラテン語かハンガリー語で書き記されたので、この聴取で、少なくとも一部の証人が話したであろうルーマニア語の発言はハンガリー語に訳されて記録されている（証言のなかで言及される会話の一部はルーマニア語でも記された）。

当時の裁判聴取には、大きく二通りのパターンがあつた。一つはこのコザールヴァールの聴取で用いられた形式、すなわち、事前に準備された何項目かの質問事項を証人たちに同じように聞くものである。この場合、聴取記録は、聴取に関わつた判事や書記、聴取を行つた年月日と場所が冒頭に記録された後、質問項目が列挙され、続いて、証人ごと（複数人まとめたこともある）に氏名・年齢・身分等が記され、それぞれ「質問第〇項目への回答」

というように証言が記録されていく。そのため、証人ごとの証言の多少が記録の分量に反映された。たとえば、先述のネチャは、一七六四年九月に行われた聴取でもっとも饒舌に話し、その証言は四頁にわたって記録された。このパターンは、裁判だけでなく、当局による様々な聞き取り調査（村の税負担や教会の使用実態など）でも広く用いられた。

もう一つのパターンは一問一答型で、おもに被疑者の取り調べや被告の聴取の際に用いられた。裁判官が、氏名・年齢・身分などを問いただし、被疑者がそれに答えた後、質問と回答が交互に行われる。この場合、文書は頁を縦半分に区切り、左に質問、右に回答が

記される。実は、本書が扱うコザールヴァールの事件では、この型の聴取記録は残されていない。それは、被疑者の発言が我々の手元にならないということの意味する。加えて、裁判の告訴状も残っていないため、原告のイシュトヴァーン、被告のユデイトとアーダム、つまり、事件の主役たる彼らの発言は、他の証人たちの証言のなかに間接的に現れる以外残されていない。それゆえ、三人の年齢も推測するよ



コザールヴァールの聴取記録  
(1765年のオナの証言のページ)

りほかないのである。

### 第一回証人聴取

質問項目からは、この聴取が行われた背景を知ることができる。コスタファアルヴァへと去っていったイシュトヴァーンが、ユデイトとアーダムを姦通罪で告訴したのである。

一六項目からなる質問事項は、まず、イシュトヴ

アーンとユデイトの夫婦関係を問うた後（二人は真の夫婦らしく互いに愛情をもって暮らしていたか？）、ユデイトの「淫乱な生活」についての質問がいくつか続き（下男ヨージ、貴族ブダイとの関係）、後半はアーダムとの関係を細かく問いたたすものであった。たとえば、「ユデイトは以前、ヨージという名の下男に身をゆだね、姦通を犯し、今も生きているペーテルという名の最初の息子を不義の子として授かったか？ 証人は、目撃したどのような行動、または状況からそのことを知ったか？」「夫人は、夫の血縁の者と一度ならず二度にわたり淫乱な関係を持ち、近親相姦の、キリスト教徒にとって聞くことも汚らわしい親族との淫行に走ったか？」



一問一答型聴取記録（1773年 コザールヴァール近郊の町レッテグの裁判記録）

といった質問に対して、証人たちは自らが見たこと、聞いたこと、推測したことを話したのである。

裁判官がこうした細かい質問を投げかけることができたのは、これらの情報が、イシュトヴァーンによって事前に提供されていたからであろう。質問項目のこうした性格のゆえに、証言で語られるユデイトの像は、醜聞で塗りつぶされていった。そういう「放埒な」ユデイト像が果たして正しいのか、それを問うことも、本書の目的になっていくだろう。

一七六四年九月の二日間に行われた聴取は、コザールヴァール村が位置するトランシルヴァニア侯国の内ソルノク県の判事二名が村にやってきて行われた。農民たち三八名に対する聴取はミルザ・トジェルという名の農民の家で、村に住む貴族六名に対する聴取は貴族の一人コマローロミ・ペーテルの屋敷で、それから幾分間隔を置いて翌年一月に行われた農民と貴族計六名に対する聴取は、別の農民ルス・ジョルジエの家で行われた。

この一回目の聴取が行われた後の一七六五年一月、県判事がユデイトとアーダムに対する命令書を携えてコザールヴァールにやってきた。この命令書は残されていないため詳細はわからないが、二人の同居を禁ずる内容だったようである。その後、その年の春にかけて、イシュトヴァーンとユデイトの間での和解も成立した。しかし、聴取の記録が取り

まとめられ清書される前に、事態が急展開することになる。

### イシュトヴァーンの帰還

従兄にして間男のアーダムに屋敷を乗っ取られたイシュトヴァーンは、一七六四年の初夏に五〇キロメートルほど北方の村コスタファアルヴァに移った後も、何度かコザールヴァールに戻ってきた。最初は、小麦の収穫のためにやってきたので七月上旬、その後、トウモロコシの収穫にもきているのでおそらく九月か一〇月にもやってきた。しかしいずれの際も自分の屋敷には立ち寄らず、近所に住む親族の家に居候し、一回目の聴取が行われた頃からはしばらくの間はコスタファアルヴァにとどまり、そこで冬を越した。

ユデイトはといえば、小麦の収穫の後に夫がコスタファアルヴァへと去ると、方角で逆方向の南に六〇キロメートルほどのエゲルベジュという村の親戚の家に行き、長期逗留する。

当てが外れたのはアーダムである。イシュトヴァーン邸を手に入れて、愛人のユデイトのそばに越してきたと思ったら、また一人になってしまったのだ。しかし、アーダムはそんなことでくじける男ではない。屋敷に残っていたイシュトヴァーンの農民に手紙と贈り物を持たせて何度となくエゲルベジュへ行かせ、ブドウ収穫の頃に、ユデイトをコザ

ールヴァールに連れ戻すことに成功する。アーダム自身の妻カタが村を去ったのとちょうど同じ頃である。こうしてアーダムとユデイトの二人は、互いの配偶者がいない村の屋敷で、翌春まで一緒に暮らすようになったのである。

一七六五年、事態は目まぐるしく展開した。年明けに判事の命令が下ると、ユデイトはアーダムと一つ屋根の下に暮らすことをやめ、数週間にわたって敷地内の農民の家で寝泊まりした。そして、雪どけの始まる三月頃（四旬節の頃）、コザールヴァールに現れたイシュトヴァーンが、ユデイトを説得してコスタファルヴァに連れ帰ったのである。その後、ユデイトが一人で（自分の農民を供につれて）コザールヴァールのアーダムのもとを訪れたこともあったが、最終的に、四月下旬の復活祭を前にして、イシュトヴァーンは家を買戻すための代金と家財一式を携え、そしてユデイトを伴って村に帰ってきた。いったんは、代金が足りないことを理由にアーダムに家からたたき出されたイシュトヴァーンだったが、復活祭すぎに再び資金を調達してなんとか家を取り戻し、アーダムは、妻子が去って久しい村内の自分の家に戻っていった。

## ユデイトの逃亡

春に屋敷を取り戻すのと前後して、イシュトヴァーンは妻と形ばかりの仲直りをしたようだ。屋敷に住みこむ農民モルドヴァーン・トジェルが「イシュトヴァーン様はその日、デーシュで奥様と和解しました」と言っているから、コザールヴァールに隣接した、内ソルノク県の中心都市であるデーシュの町に赴き、県の判事か貴族の弁護士のもとで何らかの調停を成立させたのだろう。こうして再びコザールヴァールの屋敷でイシュトヴァーンと夫婦で暮らすようになったユデイトは、アーダムと会うことをより厳しく禁止されることになった。

この「和解」がどのような状況や打算で行われたのか、史料に明確には書かれていない。ただ、はつきりしているのは、夫婦の関係が目に見えて改善したわけではなかったということだ。夫婦が和解した翌日、ユデイトは、一緒にトウモロコシ畑に行こうと言うイシュトヴァーンの誘い（おそらくトウモロコシの種まきに行こうとしていたのだろう）を、「私は行かないわ、あなたが行けばいいでしょう」と冷たく断ったうえ、農民トジェルに命じて、村はずれでのアーダムとの密会に付き合わせたのである。意に反して領主夫人の不義の片棒を担ぐ羽目に陥ったトジェルは、ユデイトに直言した。「私たちとアーダム様と一緒にいること

をイシュトヴァーン様が知ったら、また腹を立てるでしょう」。ユデイトは答えて言った。「どうすることもできないわ、来てしまったのだから」。

四月の「面会禁止」後も、多くの村人が、ユデイトとアーダムが言葉を交わすのを目撃している。イシュトヴァーン邸の生け垣越しに会話していたり、日曜日に教会に向かう時に並んで歩いていたり、一度は村の通りでアーダムに突然口づけされたユデイトが取り乱して手を振りほどくのを多くの人が見ていた。

新たな事件が起こったのは六月三日のことである。まだイシュトヴァーンが寝ている間に、ユデイトは農民の妻を供に連れて、デーシユに向けて家を出た。同じ頃、アーダムも馬にまたがってデーシユへと出かけていった。目が覚めて妻がいないことに気づいたイシュトヴァーンは、大騒ぎをして村中を探したのだろう。昼頃になって、別の貴族に仕える農民からユデイトの行き先を知らされると、自分の農民三人を引き連れてデーシユとコザールヴァールの間にあるブドウ畑へと向かった。雨のなか、畑近くの丘の上で待ち伏せすること数時間、日没近くなつて彼らは、アーダムと思しき男がブドウ畑に入つていき、その後、ユデイトとお供の農婦がやってきたのを目にした。ユデイトが一人ブドウ畑に入つていき、小一時間すると男が出ていったので、イシュトヴァーンは丘を降りてユデイト

を捕まえ、屋敷に連れ帰った。そして、屋敷内の「奥の家」に閉じ込めたのである。

雨の降るブドウ畑で、ユデイトとアーダムが何をしていたかはわからない。女主人のお供をしていた農婦も、イシュトヴァーンとそれにつき従った農民たちも、また別の丘の上からたまたまその様子を眺めていたデーシユの馬飼ひも、誰一人としてブドウの木の間で起こったことを目にはしていない。ただ、お供の農婦は、怒り狂ったイシュトヴァーンがユデイトを捕まえるのを見て身を隠すと、ブドウ畑の一角に草が倒れて「寢床のようになった」ところがあるのを目にした。彼女は、別の農婦にそのことを語ると、イシュトヴァーンに咎められて罰を受けるのを恐れて、まもなく村から姿を消した。

三日後の六月六日未明、閉じ込められていたユデイトは夫のもとから逃げ出した。ドアには外から門かぬぎがかけられていたので、寝間着のまま窓から抜け出すと、アーダムの屋敷にある農民の家に逃げ込んだ。この農民の妻は、アーダムに命じられてイシュトヴァーン邸に行くと、窓から中に入り、テーブルの上にあったユデイトのスカートや上着を持ってきた。ユデイトの娘たちは、住みこみの下女ナスタージアに連れられてアーダム邸にやってきた。彼らはしばらくの間アーダムに匿かくまわれた後、深夜、アーダムが雇った農民の牛車で、エゲルベジュに向けて密かに村を去っていった。

## 第二回証人聴取

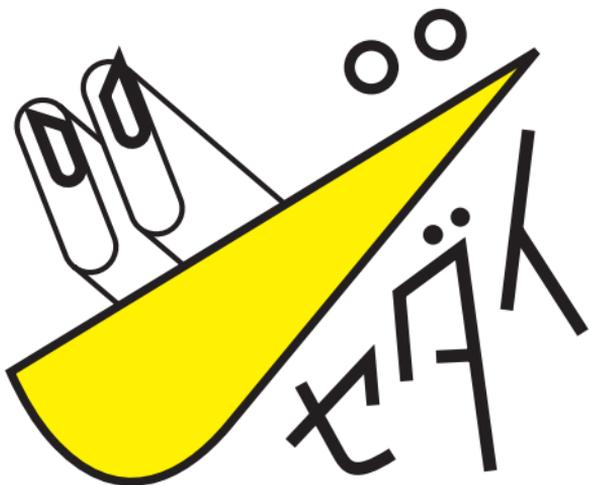
二回目の証人聴取は、ユデイトと娘たちが姿を消して大騒ぎが起こっているなかで行われた。そのためだろう、今度の聴取は、期間も、証人の数も、その証言内容の豊かさも、前回を大きく上回った。六月二〇日に始まった聴取は、七月一三日までのべ一二日間にとぼり、その間、コザールヴァールの五八人の農民と貴族に対して行われた。七月一四日に、近郊の村ネーメティで三人の村人の証言を得た後、九月には三日間にわたってデーシュの町の貴族や農民（多くはコザールヴァール出身）一三人を聴き取った。計七四名の証人の言葉は、一四六頁に上る記録に書き記された。こうして、我々の手元に残る、二回合計一〇六名分（二度の聴取の両方で証言をしている者が一四名いる）の証言が出そろったのである。

この大部の証言記録には、すでに言及したように、主役の三人、イシュトヴァーン、ユデイト、アーダームの証言は入っていない。二冊の記録に添付されてこれ以外に唯一残されているのは、二回目の聴取の翌年、一七六六年の二月にデーシュの裁判所で下された判決文だけである。意外な結果になる判決はエピログまでお預けにしておくことにして、ユデイトの逃亡に至るまでの豊富な証言群から、一八世紀の村の生活を復元していく作業

に移っていくことにしたい。その際、証言記録に加えて、村の姿を知るための別の史料（たとえば、村の徴税簿、地誌など）の分析も織り交ぜていくことになるだろう。

手始めとしてまず、ユデイトたちの事件に絞っていた照準をいったん広角に切り替えて、コザールヴァールという村とその住民たちについて見ていくことにしよう。

君は、



何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**